

2024年12月15日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教19「救い主が来られる」

マラキ3：1～3、ヨハネ4：23～30

「知らないものを礼拝している」(22節)ここにサマリア人の最大の問題があります。列王記下第17章24節以下には、アッシリアの王によって、五つの町からそれぞれの神々がサマリアに持ち込まれたことが記されています。そこでは自分たちが拝んでいる神がどういう神なのかも知らずに拝むという現実がありました。それは決して他人事ではありません。わたしたちが生きている日本社会は八百万の神々を拝む社会です。それこそ拝む対象がどういう神であるのかも知らずに拝むことが現実問題としてあるのです。自分の都合に合わせて、神を選びすぎるのです。これは受験の神様、これは商売、これは安産。そこでは拝む対象である神さまはどれでもいい。とにかく自分にとって都合のいい神さまであればよいのです。極めて人間中心、自分中心です。

このような宗教性は、そのままわたしたちの生き方となって現れてきます。自分の都合に合わせて、相手が自分にとってメリットがあるかどうか。それが人を見る判断の基準になる。それは相手の存在そのものを愛するのではなく、相手の付加価値の部分愛するという事です。でもやがてその付加価値の部分も廃れる時が来るでしょう。そうすると、もう要らないということになる。かつて五人の夫がいたこの女性もそのように付加価値の部分を見て相手を選んできたのかもしれませんが。でもそれでは満たされなかった。依然と魂は渴いたままなのです。サマリア人の女性は自分が何を拝んでいるのか知らない。真実に礼拝する神さまと出会っていない。そこに問題の本質があります。

イエスさまは、相手を知らずに拝むような間違った礼拝ではなく、真実に神さまと出会い、神さまと向かい合う、正しい礼拝へとわたしたちを招いておられます。それがここで繰り返される「霊と真理をもって礼拝する」(23、24節)ことです。「霊」とは、神さまの霊、聖霊のことです。礼拝は、単なる人間の行為ではなく聖霊の働きによるものです。聖霊の働きとは、聖書では、創造と深く結びついています。神さまが人間をお造りになられた時に、「命の息」を吹き入れてくださった。それで人間は生きるものとなったと聖書は伝えます(創世記2：7)。神さまの霊がわたしたちを新しく礼拝者として造り変えてくださいます。そうでなければわたしたちは神さまを真実に礼拝することはできません。

人間は、アダムとエバが約束を破って以来、罪ゆえに神さまの御前に相応しくない存在でありました。神さまに背き、御心にそぐわない生き方を重ねてきたのです。当然ながら、それでは礼拝者にはなれないのです。けれどもそのようなわたしたちを神さまは新しく造り変えてくださいます。第3章にニコデモの話がありました。イエスさまは「だれでも水と霊とによって新しく生まれなければ、神の国に入ることはできない」(3：5)と言われます。「水」は具体的には洗礼による罪の洗い清めを意味します。でもただ洗い清めて終わりではない。聖霊によって神さまの御前に造り変えられ、新しくされて礼拝をささげる者とされるのです。そしてその救いを行われるお方、メシア救い主こそイエスさまなのです。

この女性は、そのようなメシアが来られることは知っていました。サマリア人もユダヤ人と同様、メシア救い主を待望していたのです。旧約聖書を重んじるサマリア人ですから当然でしょ

う。特にサマリア人はモーセ五書を重んじておりましたが、申命記には「あなたの神、主はあなたの中から、あなたの同胞の中から、わたしのような預言者を立てられる。あなたたちは彼に聞き従わねばならない」（18：15）とあります。誰なのかは分からないけれども、いつかその預言者が来て自分たちを救ってくれるとサマリア人もまた信じていました。

すると驚いたことにイエスさまは、そのメシアは他でもないこのわたしだとおっしゃったのです。この女性はどんなに驚いたでしょう。ここで女性は目が開かれ、自分が誰と対話しているのかが分かりました。真実に礼拝すべきお方、自分が拝む対象と出会ったと申し上げてよいでしょう。そしてこの出会いが彼女を根底から変えることになりました。彼女は居てもたってもいられず、町に行ってサマリアの人々にイエスさまのことを伝えました。「もしかしたら、この方がメシアかもしれません」（29節）自分たちが待ち望んできたメシア救い主が来られたと伝えたのです。これまで何を拝んでいるのかも知らずに礼拝していた。でもやっと出会えた。自分たちが礼拝すべきお方、救い主と出会えた。そう彼女は人々に伝えたのです。

「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き」（28節）とあります。もともと女性は水を汲みにこの井戸にやって来ました。先祖代々、大切に受け継いできたヤコブの井戸です。毎日そこから水を汲んでは飲み続けてきました。けれどもそれでは魂の渇きは癒されなかった。夫を五人取り替えても癒されなかったのです。けれどもイエスさまと出会うと、真実に礼拝すべきお方と出会うと、この女性はその渇きを癒されました。その救いが、残された水がめに象徴的に表されています。すでに対話の中でイエスさまは言われました。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」（4：14）そのことは、この女性の身に現実になりました。飲んでもすぐに渇く水ではなく、永遠の命に至る水を彼女は発見しました。それゆえに彼女は水がめをそこに残して新しく歩み出したのです。

しかも、それまで人目を避けて水を汲みにきていた女性が、自ら人々の前に出て行き、救い主が来られたことを伝えます。その姿こそ、彼女の渇きを癒した命の水がその人の中で泉となって湧き出していることの何よりの証拠です。そしてこれは彼女だけのことではありません。イエスさまと出会い、真実に礼拝をささげるわたしたち、神さまと出会った者は、そのように自らが泉となって、その救いを宣べ伝える者へと導かれていくのです。

今年もいろいろなことがありました。病気をされて礼拝に来ることができなくなってしまった方々もおられます。思いがけず怪我をされてご不自由になれた方、また生活に大きな変化があった方もいらっしゃるでしょう。けれどもわたしたちはそういうものに支配されるものではありません。そのわたしたちのところに救い主は来られました。それゆえにわたしたちはまことの神さまと出会い、神さまを礼拝する者とされました。そして自らのうちに命の泉を持ち、この溢れるばかりの恵みを伝える者と召されたのです。水がめを置いて、それぞれの遣わされている場所へ出かけて行きましょう。

天の父よ。御前にふさわしくないわたしたちを真実に礼拝すべきあなたと出会わせてくださり、礼拝者として御前に罪を赦し、導いてくださる恵みを感謝します。どうぞこの週もそこに水がめを置いて、出かけて行って、救い主が来られたことを伝えていくことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。